同窓会会報 第12号
昭和44年12月25日
発行所
茨城県東茨城郡
内原町鯉淵5965
鯉淵学園同窓会
印刷所
新いばらきタイムス社

母校と同窓会の発展を

同窓会会長　和田文雄

去る十一月二日の第九回同窓会大会で会長に選ばれましたのでご挨拶申し上げます。

わが同窓生も初期卒業の先輩は年令も四十代半ばとなり、社会での基幹として重きをなす年代となり、また毎年迎えられる仲間は三千五百名となりました。同窓生が全国各地で活躍されている模様は同窓会に送られてきており、そして母校が着々としてわが国農業が求める人材を養成し、ますます発展しつつあることは喜びとしたいところであります。

十月三十日東畑農民教育協会長と同窓会役員がお会いしたとき、学園の将来について「鯉淵学園は鯉淵学園として運営し、その発展をはかる」ことを確認し合ったところですが、何故あたりまえのことをしたのかといえば、大会の前後に母校はその将来にとって大きな問題に直面していました、そしてその岐路を踏みこえたのです。

その一は、熟案となっていた「農協教育整備」の一環として、全国農協中央会が経営する**中央協同組合学園への吸収合併問題**であります。当初、鯉淵学園、協組短大を包含し新しい三年制の教育機関を農協の資金五〇億円で経営することとし、農民教育協会理事会も「鯉淵学園の教育を包括的に継承する」ことを農協側に要望していました。

農協の新学園設立委員各氏も何度か学園に来て実情を見て設立準備をすすめていたようですが、九月東京都内に第一年の学生四〇名余りを収容した中央協組学園が開校し、一方、協組短大は短大の学生教職員、かつての産業組合学校関係者、農業経済学会（有志）などの猛烈な廃止反対運動にもかかわらず、廃校されることとなったと聞いています。こうして鯉淵学園や短大を含めないで農協の組織内教育をする学園ができ、鯉淵学園は従来どおり、農民教育協会の経営する鯉淵学園として存続することとなったわけであります。

その二は、鯉淵学園が**農協科の学生募集を中止し、四十五年度学生から三年制とすることを決めたこと**であります。

農協科の廃止は協組学園の開校の前後、全国農協中央会から来年度の鯉淵学園の農協科の学生募集を中止するよう申し入れがあり、申し入れどおり中止し、鯉淵学園は農業科、農村生活科を三年制とすることとしたことであります。

このように同窓会大会の前後に学園の存在に関する大きな問題が起り、母校の経営問題について、同窓会としても無関心に放置することはできないこととなっているのであります。学園の発展は同窓生の発展であり、同窓生がより発展するためには、学園がより発展してもらわなくてはならないことと思慮し、また同窓生の努力が学園の評価を高くしてきたと判断し、その立場から、学園のあり方や、経営、財政について要望をしてきたところであり、今後もこの立場を貫きたい所存であります。

そして同窓会は会員の福祉、親睦に役頭することは、母校が存在の岐路に立っているとき、それは許されないことでもあり、傍観することは私たちの愛校の心からもできないことであります。

こうした外部の動きによって学園が動揺し内部的には経営財政の上からも、農業教育の機関としても本質的問題を内包していると見られています。今後、学園が発展し、本当にわが国の農業教育とはこういうものであるとの評価を不動のものとし、毎年送り出される卒業生も胸をはって、農業社会で活躍できる基盤をより強固なものとするため、同窓会員一同真剣に考え、行動を起してゆかなくてはならないと存します。そして鯉淵学園を鯉淵学園として発展させることは学園、協会、父兄、学生、同窓生が学園の現状をよく理解して将来の展望にたって努力することでありましょう。創立以来二十五年学園のために努力されてこられた協会理事各位と学園の先生、職員各位に敬意を表すとともに、今後ともご尽力をお願いする次第であります。

私たち同窓生も、忠実に自己の受持に精進するとともに、学園の運営に必要な人材の提供と資金の援助とを考慮し、母校の発展を期したいものであります。

学園教育制度の改正について

副学園長　石橋幸雄

学園の教育制度は、四十五年度から大きく変ります。学園は長い間、農業科、農協科、農村生活科の三科をもうけて教育を進めてきました。しかし、この九月、中央協同組合学園が発足し、全国農協中央会の基本的方針として農協教育は同学園に一元化することが打ち出されましたので、農協側と数次にわたって話し合った結果、相互の間に諒解が成立して、学園の農協科は中央協同組合に移譲することになり、農協科の学生募集はとりやめることになりました。したがって、学園は今後、農業科と農村生活科に全力を集中して、これを契機に今までの二カ年制を三カ年制に踏切り、教育内容の整備、充実をはかって、実質的には四カ年制の大学に劣らない程度の教育を目指して進むことになります。学園にとってはまさに画期的な改正であり、新な発展を期しての大きな転機といえましょう。

三カ年制への移行については、実はわれわれの間では数年前から検討していました。近年における社会経済の発展や科学技術の進歩にともなって、農業や農村生活はかつてみなかったような速さで大きく変貌しています。このような情勢のなかにあって、学園の教育が目指しているような広い視野にたって、農業や農村生活の進むべき方向を正しく判断して、地域社会の農業経営の発展や農村生活の改善、向上のための中核となって積極的に活動し、指導的な役割を果しうるような人材の養成ということになれば、それは、いうまでもなく近代的な科学的精神と豊かな人間性を基調として、はば広い洞察力と、高い技術と、すぐれた経営手腕と、組織者能力を備えたひとでなければなりません。このような見地から学園の教育をふりかえってみますと、もはや二カ年制の教育では不充分で、この社会の要請に応えてゆくためにはどうしても三カ年の教育期間を必要とすることを痛感していました。

もちろん、この三カ年制の問題はたんに学園だけの問題ではなくて、すでに四十三年度から発足した農林省の農業者大学校は当初から三カ年制をとり、さきの中央協同組合学園も三カ年制をとって発足しました。各県の農業講習所（県によっては農業大学校、短期大学校等）でも二カ年制の教育では不充分であることが指摘されていて、県によっては三カ年制への移行が問題になってきていることを聞いています。

しかし、学園としては、さて三カ年制に移行ということになれば、そのための教育施設や陣容の整備、充実など解決しなければならない多くの問題があり、財政基盤とも関連して、今日までなかなか実施に踏切るというところまでには至りませんでした。幸い、このたび農協科を中央協同組合学園に移譲するにあたって、農協側と学園との今後の関係について、東畑会長と全国農協中央会の宮脇会長との間に話し合いがおこなわれ、改めて学園に対する農協側からの援助についての見通しがつき、また、一方農林省の諒解も得ましたので、このたび思い切って、われわれの数年来の懸案であった三カ年制に踏切ることに致しました。いま、われわれはその移行準備に取組んでいます。

教科課程の原案はほぼでき上りました。教科課程の編成にあたっては、専門的な教科を充実することはもちろんですが、一方、はばの狭い片寄った専門教育に落入らないように、そうして、できるだけ視野を広げるために、一般教育科目に新たに社会思想史、心理、生物などを加え、農業経済関係では農業概論、農業組織化論、外国農業事情などの科目と農協関係数科目を新に設けて強化しました。技術関係では従来からの教科の充実に新たに園芸経営畜産経営などが加わります。なお、農村生活科については、今日の農村の生活指導にあたって栄養士の資格を兼ねてもっていることが有利あることから、栄養士の資格取得も考慮して、教科課程の編成にあたりました。したがって栄養、食品関係の科目がかなり増えることになります。さらに、科学性や創造能力や応用力、実践力などを向上させるための各種の実験、実習を強化することにしています。たとえば農業科では園芸実験、畜産実験、農業機械実習、派遣実習など。農村生活科では栄養、食品、食品衛生、被服などの実験、栄養指導や公衆衛生実習などが新たに加わります。

もちろん、三カ年制移行にともなって教育施設や陣容のいっそうの整備、充実をはからなければならないことはいうまでもありません。それについては年次計画をたて、順次進めてゆく予定です。

われわれは学園の教育を全寮生と結びつけて三カ年制にすることによって、四カ年制大学とほぼ同じ程度の教科を組み込むことが可能であって、実質的にはそれに劣らない教育ができることを自認しています。また、卒業者が三カ年制短大卒に準じて処遇されることについても確信をもっています。学園が三カ年制に踏切ることは、単に学園だけの問題ではなく、今後の農業者教育についての一つの試金石となり、あるいは主導的な役割を果すことになろうかと思っています。すでに二カ年制教育について多くの問題がでている農業短大や農業講習所などの教育に一石を投ずることになり、大きな影響を与えることになりましょう。また、現在の大学の農業教育上に対しても強い刺

載剤になることを信じています。

卒業生諸君にも学園の今回の教育制度の改正について充分ご諒解を得て今後いっそうのご支援をお願いしたいと存じます。

第九回同窓会大会

十一月二日・三日

大会議長　中村信夫氏

前日から続々と来学された全国各地の会員一五〇余名、特に今年はご夫妻やお子さん連れもたくさん見えられ、日頃静閑な学園も文字どおりお祭りのような賑やかさであった。

二日午後、新三番教室で第九回大会を開催、萩原会長の挨拶、来賓として鞍田学園長のご挨拶をいただいた後、議長に中村氏を選出、昭和四十三～四年度の経過報告、事業報告、決算報告、監査報告を萩原会長、坪野事務局長、田中茂秋監事の報告どおり承認、終身会費制の設定や、それに伴なう会則の変更、また四十五～六年の事業計画、予算案も原案どおり可決された。その大綱は次の通りである。

昭和四十三・四十四年度 経過報告

第八回同窓会大会において「……同窓会の組織、なかんずく事務局の体制が極めて貧弱なために、会本来の目的達成も覚束ない有様である。これを改め前進するには会員各位の努力によって、会の財政基盤を確立し、事務局も強化し、全国的に組織づくりを推進する必要がある」と決議されました。四十三・四十四年度における全ての活動は、この点を考慮してきたことはもちろん、今年六月二十八・二十九の両日には、同窓会始まって以来の願いであった支部長会議を開催、同窓会活動方針の徹底と支部活動促進の討議を通じて、今後の同窓会活動の基礎固めに努力してまいりました。

主な事業の経過は以下の通りです。

二十周年記念事業は、四十年度に始められ、その事業の大半は前年度までに完成の見通しがついた形で引継ぎました。すなわち「鯉渕学園二十年史」の発行は、第八回大会には間に合わずにしまいましたが、十一月二十三日の学園創立記念日に発行されましたし、「記念会館」の建設は第八回大会時にはその途中でしたが、四十三年三月十五日に竣工し、四月六日には関係者を招待して会館において盛大に竣工式が行なわれました。その建設資金の不足額は大会の決議に基づき特別基金、追加募金、各支部に割当てて お願いした再募金などの方法によって、その目標をほぼ完全に達成し、四十四年二月をもって募金運動を完了させました。二十周年を契機とした学園発展のための進言事項の取扱いについては、中央協同組合学園構想のゆくえを考慮して直接的話し合いを行なってきませんでしたが、別に報告致しますように、学園は当分の間これまでの体制で運営発展させなければならなくなった見通しのついた八月より、副学園長および学園運営委員会と懇談をはじめております。

名簿発行は、四十三年十一月新入会員一、七〇〇余名を追加し、また内容も若干改正して一、七〇〇部印刷発行致しました。

支部長会議は四十四年二月より計画を始め、六月二十八～二十九の両日にわたり学園において開催し、同窓会の活動方針の徹底と支部活動促進について強く協力方を要請致しました。支部長会議に代表を送った支部は二十六で、最初の試みとしては大成功であり、これが今後の同窓会活動の重要な布石になるものと確信した次第であります。しかし、事務局の体制については、四十二年九月の学園機構改革、それに伴なう人事移動で大幅に後退し、四十三～四十四年度においては同窓会としての対策がないまま経過したため、前述諸活動に伴なう事務処理に適切を欠くことのあったことは、甚だいかんであったと思っております。

昭和43・44年度 会計決算報告書

1　一般会計

① 財産目録

摘要	金額	内訳
資産の部		
現金	267,065	
貸付金	20,000	24期生会
〃	12,240	20周年会計
資産合計	299,305	
負債の部		
借入金	59,000	前期分
〃	245,000	
負債合計	304,000	
純財産	△4,700	

② 収入の部

科目	予算額	決算額
前年度繰越金	56,094	56,094
会費収入	1,000,000	1,318,393
預金利子	80,000	90,563
名簿代金	60,000	175,500
雑収入	2,000	3,292
借入金		245,000
合計	1,198,094	1,888,842

③ 支出の部

科目	予算額	決算額
会報発行費	180,000	77,000
名簿発行費	300,000	408,000
通信費	180,000	215,884
人件費	200,000	174,740
事務費	50,000	56,656
旅費	80,000	376,240
会議費	50,000	161,413
返済金	59,000	0
予備費	99,094	151,844
合計	1,198,094	1,621,777

基本金（入会金）会計

総収入　五六三、〇〇〇
総支出　三八〇、〇〇〇
差引残金　一八三、〇〇〇

① 財産目録

摘要	金額	内訳
資産の部		
現金	183,000	
預金	600,000	三菱信託銀行
有価証券	100,000	電電公社債
貸付金	304,000	一般会計へ貸出
資産合計	1,187,000	
負債の部	0	
純財産	1,187,000	

② 収入の部

科目	合計
基金	1,928,226
一般会計より繰入れ	12,240
20年史	341,000
合計	2,281,466

③ 支出の部

科目	合計
印刷費	197,300
事務費	32,236
通信費	123,695
会議費	5,630
旅費	57,000
人件費	42,950
合計	458,811

会則改正

第五章　会計

（新設）第二十八条　会費は一括終身会費として納入することができる。終身会費は学園卒業または修了後五年以内の者は四万円、六～十年の者は三万七千五百円、十一～十五年の者は三万五千円、十六～二十年の者は三万二千五百円、二十一～二十五年の者は三万円、二十六～三十年の者は二万七千五百円、三十一～三十五年の者は二万五千円とする。

（旧）第二十八条を（新）第二十九条とする。

昭和四十五、四十六年度事業計画ならびに予算

四十三～四十四年度においては、二十周年記念事業資金の募集、名簿の作成等に対する支部の協力依頼、および支部長会議の開催により、支部との連絡を密にすることを通して同窓会組織の整備拡充に努力がはらわれてきた。

しかし、支部結成が行なわれた都道府県は漸く半数にすぎず、一方会員数は四十四年度末現在正会員三、三八一、賛助会員一五、準会員五二五、合計三、九二一名から四十六年度には正会員三、九〇〇、賛助会員一五、準会員三〇〇合計四二〇〇余名と急増しつつあり、しかも会員が全国に分散居住している学園同窓会の性格から、その動静把握はますます容易なことではなくなってゆくであろう。

したがって、新年度においても、昨年度支部長会議を契機として盛上りかけてきた支部結成の促進と支部活動の発展をはかることを最重点事項とし、特に未結成支部に対しては同窓会本部役員あるいは学園教職員を派遣して支部結成の促進をはかる。

また、最近の会員年令構成の拡大、就学方法が相違する会員構成をもつようになった同窓会の性格にかんがみ、新しい活動のあり方が研究される必要があろう。今年度においてはそんな活動の具体案の検討も併せて行なうこととする。

以上の活動方針にのっとり、次のような事業を行なう。

(1) 会報の発行、年三回、合計六回。
(2) 会員名簿の発行、四十六年度。
(3) 支部長会議、四十五年度。
(4) 常任委員会、年四回、合計八回。
(5) 支部会への役員派遣、一〇回。
(6) 懇会、学園当局との懇談会、適宜

以上の諸事業遂行のために、次の予算を計上する。

昭和四十五・四十六年度予算

収入の部

科目	金額
前年度繰越金	267,065
会費	2,000,000
預金利子	130,000
名簿代	190,000
雑収入	1,000
合計	2,588,065

支出の部

科目	金額
会報発行費	478,000
名簿発行費	421,000
支部長会議費	520,000
通信費	100,000
人件費	300,000
事務費	50,000
旅費	246,000
会議費	50,000
返済金	304,000
予備費	119,065
合計	2,588,065

④ 収入の部

科目	金額	内訳
前年度繰越金	62,000	
43年度入会金	321,000	内通信教育生 272人
44年度入会金	180,000	〃 50人
合計	563,000	

③ 支出の部

科目	金額	内訳
一般会計へ貸出	245,000	
預金	135,000	三菱信託銀行
合計	380,000	

昭和四十五、四十六年度役員

会　長　和田　文雄（東京・3期）
副会長兼常任委員長　桜井　昭利（学園・2期）
副会長　石井　隆夫（茨城・4期）
常任委員兼事務局長　西村　典夫（学園・4期）
常任委員　小泉　真吉（茨城・4期）
〃　平山　嘉夫（〃　5期）
〃　田中　茂秋（〃　8期）
〃　梅崎　孝臣（〃　13期）
〃　市川俊次郎（東京・4期）
〃　青木久良子（〃　16期）
〃　砂田　義雄（学園・5期）
〃　坪野　敏美（〃　7期）
〃　田代　秀子（〃　7期）
〃　枝川　重二（〃　13期）
〃　前田　俊夫（〃　21期）
〃　小野口滋子（〃　22期）
監　査　中郡　金三（茨城・2期）
〃　張替誠一郎（〃　5期）
〃　武内　十郎（東京・4期）

（写）昭和四十四年十月三十日

農民教育協会
会長　東畑精一殿
鯉渕学園同窓会
会長　萩原　耕

要　望　書

今般、中央協同組合学園の発足に伴って、鯉渕学園農協科廃止の措置はまことに遺憾でありますが、この機会に現行の本科教育を三カ年制とし、教育内容の整備充実をはかって新しい社会の要請にこたえようとされることは、同窓会としても心から賛意を表するものであります。

しかしながら早急な教育制度の変革や組織の変更は、在学生は勿論、同窓生としても不安の念禁じ難く、かつまた多額の経費を要するものと思考致します。

この難関を克服して母校鯉渕学園を発展させるため、私ども一丸となって協力する所存でありますが、農民教育協会としても、次の二点、積極的な姿勢で対処されるよう強く要望致します。

記

(1) 鯉渕学園は将来とも「鯉渕学園」として運営し、その充実をはかること。

(2) 鯉渕学園の財政基盤を早急に確立するため、全力を尽されること。

今期役員の選出中、石橋副学園長から、学園教育制度の一大変革について説明があり、熱心な質疑応答がなされたが、予定の時刻もとうに過ぎて充分な時間が得られず、和田副会長から説明のあった農民教育協会東畑会長に提出した要望書について了承した後、新しい執行部に本件の検討善処方を付託し、新役員の顔ぶれが発表された時はすでに六時三十分、引続いて会場を一番教室に移し、賑やかな懇親会で先生方、先輩、後輩、久々の歓談は何時尽きるとも知れなかった。

同期の集い

13期生会

枝川　重二

去る十一月二日学園同窓大会終了後、友部町「金福」にて宮島先生をまねき、十三期同期生大会を開催致しました。出席者、岩手・高橋吉教妻子同伴、秋田・高橋忠生、山形・堀越廸二、新潟・田辺扶裕子、長野・佐藤良和、東京・柴田賢一、武笠桂子、福井・奥山重隆、茨城・内田（貝塚）千代子　愛息同行、岡野（酒川）ちか、鈴木吉雄、斉藤司、新地道哉、梅崎孝臣、稲川（長島）正夫の諸氏です。発起人勝又氏は都合が悪く出席出来ないとの電話あり、発起人代行梅崎氏の大会の挨拶より始めました。卒業して十一年ともなれば風格と共に頭の方もだいぶうすくなり貫録を増した諸氏もみられ、それぞれの分野で活躍している苦労話や同じ学び舎で二年間過した想い出話や、今後学園の将来などについて時の過ぎるのもつい知らず語り合いつつ一泊し、翌日は再会を約し、互いに頑張ろうと東西南北にそれぞれ分れた。

十三同期生大会は今までに十三期の集いと云うものを一回行ない（学園）その後、関東大会（大洗）とかいったような催しを二回行なったものですが、茨城でばかり行なわないで、北の方とか、南の方とか中部とかで大会を催すようにしたらどうかとの意見がありましたので、遠方の十三期生諸氏なにとぞ御協力の程お願い致します。

20期生会

石井　善兵衛

十一月二日、大会終了後の午後七時三十分、友部町〝きよ栄〟において開かれた。五年ぶりに会う顔、皆手を取りあい、肩をだきあって再会を喜んだ。パパ、ママになった顔、新婚ホヤホヤの顔、まだチョンガーのさえない顔と、五年の経過でそれぞれ変っていたが、気持は皆学園当時そのまま、一人一人の経過報告や仲間の近況など、奥野からはカンボジアでの生活体験などが話された。九時半に友部での同期会を終了、その夜は学園の来賓宿舎に泊まり、話はつきることを知らぬ有様であった。次回は熊谷と酒寄らに計画をたててもらうことになり、つきぬ名残を惜しみつつ、五年後の再会を固く約束して、それぞれの職場や家庭にと別れた。出席者、熊谷豊彦・岩手、山本（佐藤）引志・山形、石井善兵衛・山形、高橋清一・新潟、北口彬・石川、島谷憲一・富山、佐藤良夫・栃木、酒寄菊治・茨城、奥野信一・東京、森島一太郎・長野、戸田才明・愛媛、黒瀬（鞍田）

13・14・20・22期生会

喜多・滋賀、平野勇司・愛知、（編集の都合上、事務局で若干要約させていただきました。）

22期生会

小野口　滋子

学園を巣立って三年、心を踊らせた会場である来賓宿舎に集まってきました。会は幹事の挨拶に初まり、各自の近況報告や学園での思い出に花が咲き、中にはもうすぐパパになる人、まだ一人で独身時代を楽しんでいる人。しかしお互い学園時代と変らないのに驚き、学生時代に戻ったような気分でした。記念樹の月桂樹が枯れてしまったという話を聞き、カンパをして学園に補植をお願いしました。最後に寮歌など合唱して次回を約し解散しました。

同期会に出席された方は次のとおりです。

田村（重）、金久保、高山、荒野、須藤、大竹、水上、伊勢、段田、小森、横尾、田代、河内、富樫（田）、大友、菊池、薄井、池田（要）、池田（潤）、館藤、高木、西村（榎本）、澤添、保坂、多沢、伊藤、松村、川田、井上、大久保、清水、植部、高梨、藤井、吉田、中山、小野口、石川、長領、広幡。

◎お知らせ

次の同期会は三年後四十七年十一月に学園で行ないます。幹事は菊池洋一郎氏に決まりました。今回のように意義ある会にするために皆さんの御意見をおまちしております。

▽十二月十五日吉田充子さんが結婚されます。おめでとう、末長くお幸せに。

▽伊勢隆夫さんがアメリカへ行かれるそうです。御健闘をお祈りしております。

▽十一月十八日早川裕農さんが交通事故で死亡されました。皆でご冥福をお祈りしましょう。なお十分相談する余裕がなく、葬儀へは代表として、斉藤（綾）長渕、薄井の三君に出席してもらい、香典として今まで二回の同期会の残金の中から一万円送りました。従って現在の会計は約二千円の赤字になりました、督忘者の寄付をお願いします。

14期生会

原稿が間に合わず、参会された方の直々の報告ができずに残念です。聞くところによれば、集りは少々でしたが、かえって心ゆくまで語り合い、飲み合ったとか。

同期生会等の開催準備経費立替えについて

最近、同期生会や機関紙の発行など、横の連絡も強めてゆこうとする動きが活発で、まことに嬉ばしい傾向と歓迎しております。会の予算が許すなら、これらの資金についても思い切った負担をしたいところですが、現在のところそれもかなわず、常任委員会で検討の結果、諸連絡や出版経費などを、一時立替えるなど、出来るだけのことはやって参りたいと考えております。会報の活用なども含めて事務局と連絡をとって下さるよう、お待ちしております。

24期生会誌「純生」

A5・タイプ印刷、54頁、神崎喜代子、赤海悦子、堀江博文、加藤成一編集多数の同期生の原稿が収録されており、同期生ならずとも、読むものを楽しませ勇気づけてくれる。約三千部ほどの残部あり、希望者は郵送共五〇〇円を事務局あて送って下さい。

◎◎◎支部だより◎◎◎

静岡・三重・京都・奈良・岐阜

◎◎静岡県支部◎◎

第三回鯉渕学園同窓会静岡支部総会が開催された。

八月六日静岡市内の旅館において開催され、鞍田学園長（静岡中央大会の講師として来静中）と私（桜井）が出席した正会員五十五名のところ二十数名が集まっての盛会であった。聖通りの進行によって次の役員が再選された。支部長山下（1）副支部長米倉（2）、今村（4）監事内山（9）、

この外に事務局として、静岡市内勤務の村田（11）清水（11）勝又（13）の三氏も再選して、業務をとっており、当を得た方法と考える。その業務報告を聞いて、学園の特研旅行の度に、また在学生が個人的に毎々御世話をお掛けしており、その負担は相当なものになると思われ、心から御礼を申しあげた。他の支部においても同様だと思われるけれども、支部会の盛会を大いに喜び、この会を永く続けるためにも鯉渕学園の存続、発展を計らねばならぬ、とのおしかりとはげましを受けた次第であった（桜井昭利）

◎◎三重県支部（潮会）◎◎

八月二十三日午後五時より多気町相可の鹿水亭において開催された。第七号台風のためか、会は予定より遅れ、しかも出席者は石田（2・支部長）、遠美（3）奥野（3）、武岡（3）、花井（5）、山中（7）、小牧（18）の七氏と少なかったが、終始なごやかにもたれた。

会は今後の運営、特に若い会員の出席を促すべく協議され、最後に会長に石田氏を再選、事務局長に西田氏（18）を選出された。本部より坪野が出席、本部・学園の近況を報告し、それぞれに貴重な御意見を拝聴してきた。懇親会の席では今度の大会には間に合わぬが、次年度あたり潮会員つれだって学園を訪ねたいと思うので、宿を世話してほしいと頼まれてきました。（坪野敏美）

◎◎京都、奈良県支部◎◎

両支部は例年合同で会をもっておられ

ます。今年は杉原京都支部長のはからいで、八月二十四日京都市の白河院で開催されました。

総会のあと坪野より本部・学園の近況を報告し、杉原会長（京都家政短大教務課長）より学生募集公告を「蛍雪時代」に是非掲載した方がよいなど、多くの御意見を拝聴してきました。

出席者二十名。氏名をあげませんが、その特色は吉谷・森田・竹村三夫妻同伴で出席されたこと、森田・竹村・吉田（彩蘭）さんが愛児を伴なわれ、懇親会は非常に家庭的であり、また出席者二十名中八名が女子で、雰囲気が非常に明るかったことです。

万博にお出掛けの節は、ぜひ京都にもお立寄りをとの伝言をうけたまわってまいりました。（坪野敏美）

岐阜県支部

盛夏の暑さもいくらかやわらいだ八月三十日に、岐阜県支部同窓会が岐阜市「岐陽会館」において開催された。当日は土曜日でもあって、午後二時過ぎからぼつぼつ会員が集り、久し振りの対面になにかと話しに花を咲かせているうちに、時間も経過して三時過ぎには出席予定者の大半が顔を揃えたので開会の運びとなった。

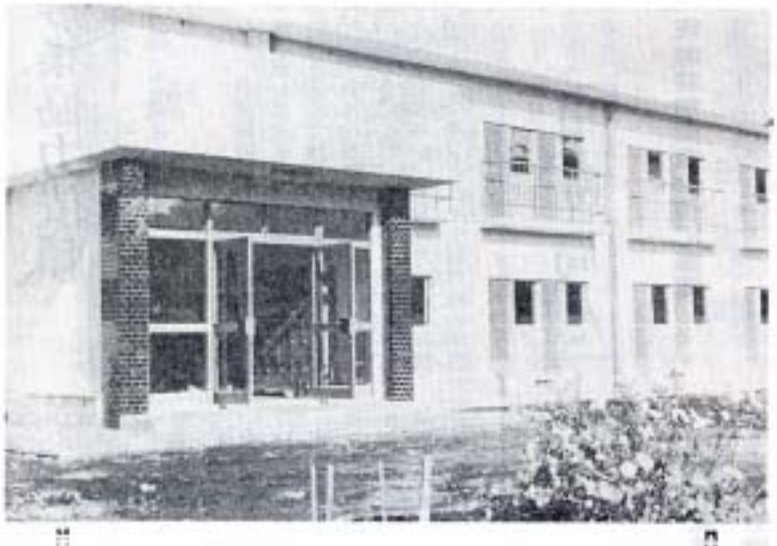
集まった会員は、清水（1）、田井（1）、鳥本（2）、谷口（2）、夏島（2）、松井（2）中道、松永（3）、今福（3）、青柳（7）、高橋（9）、高津（12）、島（14）、池田（19）、伊藤（20）、片田（24）、平田（24）、野尻（通3）の十八名と、元教授大川徳太郎先生、愛知県支部長岩田勇さんの特別参加、さらに本部より砂田事務局員の出席などもあって大変賑やかに行なわれた。

会議の進行は、松永支部長より前回からの経過報告があり、特に六月末に学園において開催された支部長会議について詳しい報告があった。その後学園問題その他で質疑があり、砂田事務局員からも、学園の内外の諸情勢や、十一月始に開催される第九回大会に関して、さらに、会費その他の問題について説明や要望があった。最後に次期役員について話し合われ、支部長には三期松永晴夫氏（県庁果樹専技）が留任され、また支部幹事として九期の高橋義氏（県農協中央会）が選ばれた。引続き、四時半頃より懇親会となり、新旧入り乱れて、学生時代の思い出やら、現在の職場での問題、さらに、先輩は二世の自慢話し、若い会員は、将来良い伴侶を得ることなどについて、盃を汲み交わしながら話しがはずみ、七時近くまで盛大に続けられた。（砂田義雄）

学園人事移動

採用　前田俊英　職員

（同氏は21期生、鳥取県出身・教務課所属）



男子寮（一棟）完成

友部街道から男子寮、食堂に向って入ること四～五十メートル左手の松林に、写真のような素敵な新寮が完成した。昨年度に半棟、今回半棟、合わせてようやく一棟出来上ったわけだが、これで八十名（一部屋四名）の学生が収容出来ることになる。すでに昨年出来上った左半分には今年四月に四〇名入っているが、過日完成した右半分は来年四月から使用することになっている。玄関もなかなか明るいし、各部屋も洒とゆったりとっている。ロッカーなどの調度品も新しいセンスで整備され、これで冷暖房となると申分ないが、残すところ同様の寮が二棟、大食堂、さらに女子寮の新築が控えているだけに、その点は石油ストーブ（備え付け）でがまんしてもらう外はあるまい。早いもの勝ちというのが世の常であるが、学園の諸設備からすると遅いもの勝ちヲバラックまがいの旧寮で勉強したOBの述懐。施工は新教室を担当した梶並建設（社長・梶並清一氏、一期生）。

昭和45年度学生募集協力依頼

教務課長　築島　宏

拝啓　向寒のみぎり、卒業生の皆さんにはいよいよ御健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、ご承知のように今日のわが国農業や農村社会は未曽有の大転換を迫られ、その変貌は予想を絶するものがあります。このような情勢の中にあって、広い視野にたって、農業および農村社会の進むべき方向を正しく判断し、地域社会の農業経営や農村生活の改造発展のための中核的役割を果すべく、進んで農村にとびこんでゆく有為の人材を養成するには、もはやこれまでの二カ年制の教育では十分ではなく、どうしても三カ年の教育期間を必要とするとの結論に達しました。もっとも三カ年制についての検討はすでに数年前からすすめてまいりましたが、三カ年制に移行するには、教育施設や教授陣容の整備充実を伴なうことは当然であり、なかなか実現の運びに至りませんでした。

幸い、農林省、農協団体等の御支援を得てようやく三カ年制への移行準備もすみ、来年度（昭和四十五年四月）から、いよいよ念願の三カ年制に踏み切ることに決定、同封申しました要項によって学生募集を行なうことになりました。

なお、農業協同組合科は、来年度から募集を致しません。長い間農業科、農村生活科と並んで鯉渕学園教育の三大主柱の一つであった農業協同組合科の募集をとりやめることは、内外から哀惜の声しきりでありますが、本年九月から、全国農協中央会の経営する中央協同組合学園が発足し、鯉渕学園と密接な連繋をもって、新しい農協マン教育を推進することになった現在、思い切って鯉渕学園の農協科は中央協同組合学園に移譲し、農業科、農村生活科の二科を三カ年制にして整備充実をはかり、実質的には四年制大学に劣らない内容の教育を目指して新しい農村社会の要請に応えようとするのが今回の教育制度改正の主旨であります。

何とぞこうした経緯を御了察の上、一そうの御理解と御協力をたまわり、これから鯉渕学園に学ぼうとする前途有為の諸君を一人でも多く御推せん下さるようお願い致します。敬具

事務局だより

萩原耕前同窓会長に感謝

昭和三十九年の十一月、第六回大会で会長に選出されて以来今日まで満五カ年、お忙しい普及所長業務のかたわら、同窓会のためにご尽力下さった萩原前会長のご苦労は筆舌に尽せません。同窓会の総力を挙げて取組んだ創立二十周年の大事業、相関連して多大の時間と心労をおかけすることになった学園運営の諸問題等に和田副会長（今期会長）とともに同窓会を今日の姿にまで育てて下さったご労苦に対し、私ども全同窓生、心から感謝の意を表したいと思います。ほんとうに有難うございました。

坪野敏美前事務局長ご苦労様

昭和四十二年十一月からまる二カ年にわたって、三千有余の同窓会の台所を一手に引き受け、これまた学園業務多忙の中を粉骨砕身事務局の中核として、内外多事多難な時期を立派に乗り越えて下さいました。二十周年事業の総しめくくり、大へんな会員名簿の作成事務、同窓会はじまって以来の全国支部長会議等々専任ですら大変な仕事を確実にやりとげてくれました。ほんとうに、ほんとうにご苦労様でした。

新旧役員の交代

新役員の名簿は前記の通りですが、長い間常任委員として本会発展にご尽力下さった大場茂男（5・東京）、栗田悦二（6・茨城）、渡辺正信（7・茨城）、須田哲也（16・茨城）、監事の鈴木聖志（5・茨城）の各氏、ほんとうに有難うございました。何とぞ今後ともご指導とご鞭撻をお願い致します。

45・46年度同窓会々費納入のお願い

毎年のことで申訳ありませんが、今年もよろしくお願い致します。毎回振替用紙をはさんでおりますので、すでに納入下さった人には無駄であり目ざわりかと思いますが、発送事務の関係上、もうしばらく現行のままお願い致します。

編集後記

二カ年事務局長を休ませて貰ったら、またやれということです。遠慮はしてみたものの同窓会の内情から断わることもならず、引受けました。和田会長はじめ役員の方々、また全国の会員の皆さんが、これほどまでに母校を案じ、会のためにご尽力下さっているのに、学園に残っている私がモタモタしておられませんから、やって参ります。どうか今後ともよろしくお願い致します。ではよい年をお迎え下さるよう。西村典夫